

イメージ統御と対象の感情価及び鮮明度の関連

宮崎 拓弥

(北海道教育大学教育学部旭川校)

Key Words: イメージ統御, 感情価, イメージ鮮明度

イメージ対象の感情価が異なるとその対象をイメージしたときの鮮明度も異なり、対象がポジティブなものやニュートラルなものと比較してネガティブなものであった場合には不鮮明であることが明らかにされてきている(Bywaters, Andrade, & Turpin, 2004; Hertel & Parks, 2002; Motoyama & Hishitani, 2016)。イメージの特徴的性質には、鮮明度の他に対象をいかに自分の思い通りに動かすことができるかというイメージ統御を挙げることができるが、このイメージ統御も対象の感情価の影響を受けることが予想される。宮崎(2015, 2016)は、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブな感情価をもつ様々な対象を用いてそれらの統御のしやすさを比較するとともに、イメージ能力やイメージ統御能力といった個人差との関連を検討した。本研究では、宮崎(2016)の実験結果を再分析することにより、イメージ統御と対象の感情価、および鮮明度の関連を明らかにする。

方法

実験参加者 北海道教育大学教育学部旭川校の大学生 58 名 (男性 22 名, 女性 36 名) が実験に参加した。

質問紙 イメージ鮮明度の測定のために Vividness of Visual Imagery Questionnaire: VVIQ (Marks, 1973)を、イメージ統御能力の測定のために Mental Rotation Test: MRT (Vandenberg & Kuse, 1978)を用いた。

刺激 本山・宮崎・菱谷(2007)の単語リストから、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブの各 10 語の名詞を刺激として用いた。なお、これらの名詞の感情価評定値は、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブのすべての組み合わせで有意差が認められ

るように選定した($F(2, 27) = 766.21, p < .001$)。一方で、これらの名詞のイメージ価評定値は、各感情条件間で有意差が認められないように選定した($F(2, 27) = 0.34, n.s$)。

手続き 質問紙と実験は、実験参加者ごとに実験、VVIQ, MRT の順に実施した。実験の 1 試行の流れは次の通りであった。画面中央に凝視点を呈示した後、イメージ対象である名詞を呈示し、各名詞の指示対象物の視覚イメージをできる限り鮮明に形成して、そのときの鮮明度を「まったくイメージが浮かばない」を 1, 「中くらい」を 3, 「完全にハッキリしている」を 5 とする 5 件法で報告するよう求めた。その後、「今形成したイメージを別の色に変えてください (色変換)」と呈示し、そのときの統御のしやすさを「まったく操作できない」を 1, 「中くらい」を 3, 「非常に操作しやすい」を 5 とする 5 件法に基づいて報告するよう求めた。続いて、「今色を変えたイメージを上下逆さまにしてください (回転)」と呈示し、色変換と同様の基準で評定することを求めた。これらの試行をポジティブ、ニュートラル、ネガティブの各条件につき 10 試行ずつ実施した。

結果

イメージ統御の指標である対象の色変換評定と評定までの反応時間、および対象の回転評定と評定までの反応時間を従属変数とし、VVIQ 得点 (高イメージ者ほど高得点になるように変換済み)、MRT 得点、対象の鮮明度評定と評定までの反応時間、およびイメージ統御の各指標を独立変数とした重回帰分析を行った。なお、重回帰分析はステップワイズ法によった。

ポジティブ対象のイメージ統御との関連の検討

色変換評定については、鮮明度評定のみが有意な関連を示すことが明らかになった。また、色変換反応時間については、鮮明度評定とその反応時間が有意な関連を示した。回転評定については、色変換評定とその反応時間が有意な正の関連を示し、回転反応時間が有意な負の関連を示した。回転反応時間については、色変換評定とその反応時間が有意な正の関連を示し、回転評定が有意な負の関連を示すことが明らかになった（表1）。

表1 ポジティブ対象についての重回帰分析結果

	色変換評定	色変換反応時間	回転評定	回転反応時間
VVIQ	.18	-.01	.13	-.05
MRT	.01	.02	-.12	-.02
鮮明度評定	.65***	.24**	.06	-.09
鮮明度反応時間	-.07	.96***	.10	.16
色変換評定	-	-.06	.69***	.27**
色変換反応時間	-.09	-	0.45**	.78***
回転評定	-	-	-	-.44***
回転反応時間	-	-	-.68***	-
R ²	.41	.80	.67	.79

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

ニュートラル対象のイメージ統御との関連の検討

色変換評定については、鮮明度評定のみが有意な関連を示すことが明らかとなった。また、色変換反応時間については、鮮明度反応時間のみが有意な関連を示した。回転評定については、VVIQ、色変換評定とその反応時間が有意な正の関連を示し、回転反応時間が有意な負の関連を示すことが明らかとなった。回転反応時間については、色変換評定とその反応時間が有意な正の関連を示し、回転評定が有意な負の関連を示した（表2）。

表2 ニュートラル対象についての重回帰分析結果

	色変換評定	色変換反応時間	回転評定	回転反応時間
VVIQ	.13	.13	.21*	-.07
MRT	.07	.03	-.09	-.02
鮮明度評定	.68***	.14	.16	-.05
鮮明度反応時間	.04	.85***	-.07	.14
色変換評定	-	.02	.65***	.25**
色変換反応時間	-.04	-	.39*	.84***
回転評定	-	-	-	-.38***
回転反応時間	-	-	-.63***	-
R ²	.45	.71	.75	.87

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

ネガティブ対象のイメージ統御との関連の検討

色変換評定については、鮮明度評定のみが有意な関連を示すことが明らかとなった。色変換反応時間については、鮮明度評定とその反応時間が有意な関連を示した。回転評定については、VVIQと色変換評定が有意な関連を示すことが明らかとなった。そして、回転反応時間については、色変換反応時間のみが有意な関連を示した（表3）。

表3 ネガティブ対象についての重回帰分析結果

	色変換評定	色変換反応時間	回転評定	回転反応時間
VVIQ	.14	.01	.32**	-.11
MRT	.19	-.00	-.18	-.02
鮮明度評定	.66***	.24***	.18	-.06
鮮明度反応時間	.11	.90***	-.11	.17
色変換評定	-	-.07	.54***	-.05
色変換反応時間	.06	-	-.15	.91***
回転評定	-	-	-	-.10
回転反応時間	-	-	-.18	-
R ²	.43	.81	.53	.82

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

考察

重回帰分析の結果からは、イメージ対象の色を変換する過程は、今回の実験の一連の課題のうち、直前に行った課題である対象の鮮明度評定に関わる過程と関連することが明らかになった。これは、対象の感情価の違いによらず共通して示された。一方で、イメージ対象を上下逆さまに回転する過程に関しては、どの感情価の対象であっても対象の鮮明度評定に関わる過程とは関連せず、やはり直前の課題である色変換評定に関わる過程と関連することが示された。以上に共通するのは、色変換であれ、回転であれ、直前に行った課題に関わるイメージ過程が後続の過程に影響を与えていることである。これらの結果は、一度形成したイメージをそのまま色変換したり回転したりするのではなく、統御過程ごとにイメージを何度も書き直す作業が行われていることを示唆するものと解釈することができる。この解釈は、一般的な直感的理解とも矛盾しないと思われる。

以上は、対象の感情価の違いに関わらずイメージ統御過程に共通して示された特徴であるが、回転過程については、対象の感情価の違いによる特徴も明らかとなった。1つには、ニュートラルとネガティブな対象の回転評定は、いずれもVVIQ得点と正の関連があり、この過程がイメージ形成能力の影響を受けていることが示されたことである。さらに特筆すべきは、ポジティブとニュートラルな対象の回転評定は、その反応時間と負の関連があることであり、イメージを容易に回転できるときには、その判断に要する時間も短いことを示しているといえる。これは、イメージ処理過程を情報の流量で捉えた場合に(Hishitani, Miyazaki, & Motoyama, 2011)、ポジティブな対象とニュートラルな対象は流量が多く、即座に判断することができることを反映しているのかもしれない。

MIYAZAKI Takuya